

「刈田」と書かれた土器

平安時代の豪族の家が発見された前戸内遺跡では、「刈田」と書かれた土器が出土しました。奈良時代の歴史書「続日本紀」には「延長5年(721年)陸奥国柴田郡の二郷を分割して刈田郡を置く」という内容の記録があります。土器に書かれた「刈田」の文字は、当時の郡名の可能性があります。

前戸内遺跡のある円田盆地北部は、現在刈田郡蔵王町に属していますが、柴田郡との境界が時代によって変化した地域でした。「続日本紀」に記された刈田郡の「二郷」がどこを指すかも明確でなく、古代の円田盆地が柴田郡と刈田郡のどちらの郡域に属したのかは未解明の謎だったのです。

前戸内の豪族の家から「刈田」と書かれた土器が出土したことで、平安時代には円田盆地を含めた現在の蔵王町のほぼ全域が刈田郡に含まれていた可能性が高くなりました。



(破壊部分・筆跡は複数)

土器に描かれていた「刈田」の文字。(前戸内遺跡、平安時代)

また、現在の白石・刈田地方で刈田郡が設置された奈良時代の遺跡が集中するのは円田盆地北部と白石盆地東部(白石市を中心部)で、「二郷」の中心地はこの二ヶ所と考えられるようになってきました。白石市の大畠遺跡では刈田郡の役所跡が発見されています。遺跡の発掘調査から、私たちの郷土・刈田郡成立の謎が、少しづつ解き明かされようとしています。

「都遺跡」の謎

円田盆地の中央に近い萩川のほとりに、かつて小高い丘がありました。古くから土器や瓦が多く見つかる場所として知られ、「都」という地名で呼ばれていましたが、昭和30年代の萩川の堤防をつくる工事で削られてしまい、遺跡も完全に消滅したと思われていました。

この都遺跡を発掘調査したところ、わずかに残された丘の



都遺跡で見つけた瓦(奈良時代)

低い部分で大型の建物跡や、丘を囲むように巡らされた堀や溝の跡も見つかりました。飛鳥～奈良時代の土器とともに、建物の屋根を葺いた瓦も出土しています。

当時、瓦を用いた建物は、大和政権などつながりのある役所や寺院に限っていました。都遺跡では仏教に関わる遺物が出土していないので、役所のような施設だったと考えられます。

最近の研究では、都遺跡には刈田郡が独立する以前の柴田郡の役所が造られた可能性が議論されています。

都遺跡の謎が、発掘調査と研究から少しずつ解明されようとしています。田んぼの下で発見された遺跡には、謎を解くカギがまだまだ眠っているのです。

表紙写真解説

- ①発掘調査成果見学会(前戸内遺跡)
- ②駒ヶ作居跡の発掘調査(十郎田遺跡、平安時代)
- ③穴門式居跡から出土した土器(刈田遺跡、飛鳥時代)
- ④平安時代の土器(前戸内遺跡)
- ⑤窯址から大量に出土した木製品(十郎田遺跡、鎌倉時代)
- ⑥粗大な形状しかも日本製品の素材など(十郎田遺跡、鎌倉時代)
- ⑦江戸時代の漆器、木製品(車地廻塗跡、江戸時代)
- ⑧材木場で囲まれた飛鳥時代のムラ(十郎田遺跡)
- ⑨大型の鉄住居跡(十郎田遺跡、飛鳥時代)
- ⑩現在に残る江戸時代の農家建築(奥平家住宅)

イラスト・復元画製作 戸妻ひみみ



蔵王町と円田盆地の位置

円田盆地の遺跡群

発掘成果から見えてきた平沢・小村崎の歴史



蔵王連峰を望む豊かな田園地帯の広がる蔵王町東部の一帯は、三方をなだらかな山地に囲まれてあり、円田盆地と呼ばれています。円田盆地の北部にある平沢・小村崎地区では、県営は場整備事業などに伴って数多くの遺跡を発掘調査しました。述べ10万平方メートルにも及ぶ大規模発掘調査の成果から見えてきた、平沢・小村崎の歴史をご紹介します。



編集・発行 蔵王町教育委員会 2014年5月30日発行
〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町字大内字西浦北10
TEL:0224-33-3008 FAX:0224-33-2328 info@dokitan.com

蔵王町教育委員会

遺跡の宝庫・円田盆地

～県営ほ場整備事業と遺跡の発掘調査～

戦王連峰の東麓に抱かれた戦王町には、戦王火山の造り出した変化に富む地形・地質と、四季折々の豊かな自然に育まれた豊かな文化が息づいています。戦王の山と、そこによらす人々が創り出した戦王山麓の風景は、私たち町民の誇りであると共に、未来へ守り伝えるべき大切な財産でもあります。

戦王町には約200か所の遺跡が発見されており、私たちの地域の歴史を伝える貴重な文化遺産として保護されています。遺跡は、古文書などには記されていない地域の実情や、まだ文字がなかつた時代の人びとの暮らしぶりを、私たちにありますように教えてくれるものであります。

戦王町東部の円田盆地は、戦王連峰を望む豊かな田園地帯です。盆地北部の平沢・小村崎地区では、大規模なほ場整備事業が計画されました。計画区域には多くの遺跡があるので、田畠となる部分は盛土で遺跡を保存し、道路や水路などの工事で遺跡に影響のある部分では工事の前に発掘調査を行って記録を残すことになったのです。

本格的な発掘調査は平成15年度に始まり、平成23年度までに116遺跡を調査しました。

総発掘面積は10万平方メートルに及びます。その膨大な成果の中には、日本の古代史にも深く関わる重要な新発見や、現在の平沢・小村崎の成り立ちを教えてくれる発見もありました。



小村崎地区から見た戦王連峰



円田盆地北部(平沢・小村崎地区)の遺跡



遺跡の発掘作業

みんなで取り組んだ発掘調査

遺跡の発掘調査は、とても大変で時間のかかる作業です。円田盆地の発掘調査では、地元の平沢・小村崎地区などから毎日たくさんの作業員さんが参加して、発掘作業に取り組みました。このほかにもほ場整備事業を行なう宮城県大河原地方振興事務所や戦王町土地改良区など、たくさんの人たちの「地域の歴史や文化を受け継ぐこと」への理解と協力によって、貴重な遺跡の記録を残すことができました。

竪穴住居での暮らし

縄文時代から平安時代における人びとは、竪穴住居に暮らしていました。竪穴住居は、地面を平らに掘り下げたところに柱を立て、屋根をかけた家です。当時の人びとは木や草、土などの自然の材料を上手に使って暮らしていました。

円田盆地では、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡がたくさん見つかっています。現在と変わらず、円田盆地では米づくりをする人びとのムラが多く営まれていたようです。

竪穴住居では、家の真ん中に炉を作って煮炊きをしていましたが、古墳時代の今ごろになると「カマド」が発明されます。現在でも町内の古いあ宅にはカマドがありますが、その一つは1,600年も前にさかのぼることができるのです。



竪穴住居跡(六角遺跡・奈良時代)

竪穴住居跡の発掘調査(窪田遺跡)

竪穴住居での暮らし

炉(焚き火)での煮炊き

カマドでの煮炊き

土器を使った暮らし



竪穴住居から出土した土器(六角遺跡・古墳時代)
お湯を沸かした壺の上に、お米を入れた蒸し鍋を乗せて使いました。



竪穴住居から出土した土器(①・②: 六角遺跡・③: 窪田遺跡・古墳時代)
左上の写真にある大きな壺は、鍋や水壺として使いました。



古墳時代の土器セット(六角遺跡・古墳時代)

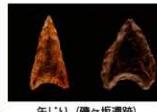
手前の台付きの皿は、食のものやお供え物を盛りつけるのに使いました。



縄文の狩人たち

今から数千年前、縄文時代の円田盆地は水辺に集まる動物たちをねらう縄文人たちの「狩りの場」でした。六角遺跡や原遺跡、磯ヶ坂遺跡などで、「落とし穴」や「弓矢の「矢じり」として使った石器などが見つかっています。

盆地のあちらこちらで、丘の上のムラからくり出した狩人たちが集団でシカやイノシシなどの獲物を追いこみ、穴に落として捕らえる「追い込み獵」が繰り広げられていたのでしょうか。



落とし穴を使った追い込み獵の様子



落とし穴の調査（六角遺跡）

米づくりはじまる

円田盆地では、弥生時代のムラの跡はまだ見つかりませんが、都遺跡や六角遺跡、磯ヶ坂遺跡などで当時の土器が出土しています。遅くとも弥生時代の中ごろには、円田盆地でも米づくりが始められたようです。

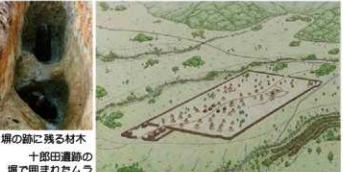
稻穀のついた弥生土器（都遺跡）



律令政府の前線基地現る！

～柴田・刈田地方の開拓拠点～

大和政権が大化の改新によって新しい國づくりを進めていた頃、十郎田遺跡の丘に、周囲を堀で囲んだ大規模なムラが突如として出現しました（表紙写真⑧）。このような囲いのあるムラは、大和政権の律令政府が東北を治めるため役所の前身として造られたものだと考えられています。この十郎田遺跡のムラを拠点にして、柴田・刈田地方の開拓が進められた可能性が議論されています。日本の國の原型がつくられた飛鳥時代の歴史の記憶が、円田盆地にも刻まれているのです。



刈田郡に移り住んだ人びと

～奈良時代の開拓拠点のムラ～

奈良時代の養老5年（721年）、それまでの柴田郡から独立して新たに刈田郡がつくられました。この境のムラの跡が、六角遺跡、窪田遺跡、堀の内遺跡などで見つかっています。

このムラは、大和政権が東北地方で勢力を拡大させるために送り込んだ移民の人びとのムラです。

出土した土器を見ると、人びとは関東地方から福島県域へ、さらにそこから刈田郡の円田盆地へと移り住んできらしいことが分かってきました。故郷を遠く離れた人びとが円田盆地に暮らし、活躍した時代があつたのです。

移民の人びとが暮らした住居跡



六角遺跡から出土した土器
関東地方の土器の技法が見られます



年代	約2万年前	約1万年前	約2千年前	約1千500年前	約1千年前	約1千年前	約500年前	現在
時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥	奈良	平安	鎌倉
西暦	0	100	200	300	400	500	600	700

平安時代のムラと豪族の家

平安時代になると、前田内遺跡の丘に新しいムラが営まれました。水辺に広がる湿地に田を拓き、米づくりをする農民の人びとのムラです。丘の少し高いところには、ムラをまとめる豪族の家がありました。豪族の家には主の暮らす主屋や、初などを蓄えた倉庫や廻場を囲むように立ち並んでいました。

豪族の家やムラの住居跡からは数多くの土器や鉄製品などが出土し（表紙写真④）、土器には「刈田」などの文字が書かれたものもありました。



大きな穴をもつ建物跡



前戸内遺跡のムラと豪族の家

鎌倉武士の暮らしと職人

鎌倉時代になると、十郎田遺跡や西墨多遺跡などの丘に武士の屋敷がつくられました。地方の役人に代わって力をつけた武士は、屋敷のまわりを堀や塀で囲み、質素な建物で暮らしました。また、彼らは屋敷の中にさまざまな職人を抱えました。

十郎田遺跡の屋敷の一角からは、作りかけの木器の桟や皿が大量に出土しています。十郎田の屋敷には木地職人の工房があったようです。（『刈田由こけし』の木地集落ができる500年も昔のことです。今も昔も、蔵王山麓の豊かな森が人びとの暮らしを支えてきたのです。



武士の住まいと考えられる建物跡

大量に出土した木器の未製品

土塁と堀で守られた領主の館

高さ3mもある土塁が今も残る西小屋館跡は、鎌倉～室町時代の小村崎あたりを治めた領主の館の跡です。館の一部を発掘調査したところ、土塁の外側で堀跡が発見されました。幅が推定8～10m、深さ1m以上。堀の岸は急な角度で削り取られ、簡単には抜け出せないよう工夫されていました。西側では家の屋敷跡が見つかりました。堀の外側も、家の武士がしっかりと守りを固めていたのです。



西小屋館跡を囲む土塁と堀の跡（正面の木立の部分に土塁があります）

家の守りを固めた堀の跡と土塁

堀の内部

堀の外側

江戸時代の平沢・小村崎

江戸時代になると、高野家が平沢要塞を拝領し、250年余りにわたって平沢の町づくりに力を尽しました。高野家が整備した平沢の町割りは、今もその名残り留めています。約200年前の農家のたたずまいを今に伝える奥平家は、江戸時代の平沢村・小村崎村の肝いり（村役人）を務めました。

江戸時代初期の屋敷跡が発掘された車地蔵遺跡では、美濃（岐阜県）の志野織部産や中国（中国）の景徳鎮産の陶磁器、三引両の紋が入った漆器など、高級品が出土しました。裕福な階層の人物であったことがうかがわれ、高野家または当時小村崎に領地を得ていた秋保氏の家臣屋敷と推定されています。



屋敷跡から出土した漆器

江戸時代後期に建てられた奥平家住宅

古代人の「ものづくり」

古代の人びとは、身の回りにあるさまざまな材料を利用して生活に必要な道具を作り出していました。そうした「ものづくり」の跡が、円田盆地の遺跡からも見つかっています。

土器づくり

前戸内遺跡では、粘土を探掘した穴が見つかりました。穴の中からは、土器とともに焼けた土や木炭片が多く出土しているので、ここで探掘した粘土を使ってムラの中で土器づくりをしていたと考えられます。



粘土を探掘した穴と、穴の中から出土した土器（前戸内遺跡、奈良時代）

木器づくり

十郎田遺跡では、武士の屋敷の一角から作りかけの木器が大量に出土しました（表紙写真⑤・⑥）。椀や小皿の形に粗く形を整えたもので、この後に口凹で削って仕上げました。さらに漆を塗って、漆器として使われることもありました。

ケヤキの木を無駄なく使い、どれも同じように作られているので、腕の良い職人がいることが分かります。同じ形のものを大量に作っているので、仕上げた製品はそのまま市で売られかね、漆職人のところへ売られたかも知れません。



出土した木器と推定される完成品の形（十郎田遺跡、鎌倉時代）

土器から見える地域間交流



在地の土器（左）と関東系土器（十郎田遺跡、飛鳥時代）

武器づくり

前戸内遺跡では、穴式居跡から鍔や小刀などの鉄製品が出土しました。小鍔ぬを行なう時に出来る歓がす（鉄滓）も出土しているので、ムラの中に鉄の道具づくりをする鍛冶工房があつたと考えられます。



鉄の小刀と鍔、歓がす（鉄滓）
(前戸内遺跡、平安時代)

炭焼き

西原敷遺跡では、皮焼きをした穴が見つかりました。この穴は一边が70~90cmほどの正方形で、深さ40cm以上あります。穴の内側は、火を受けて赤く変色していました。このような小さな施設で焼かれた炭は、工具づくりで使われることが多かったようです。



皮焼きをした穴（西原敷遺跡、戦国時代）

祈りとまじないの習俗

前戸内遺跡など平安時代のムラの跡からは、文字の書かれた土器が多く発掘されました。書かれている文字には「大」、「内」、「丈」、「人」、「本」、「萬」、「膳」、「草手」、「匂田」などがあります。1文字のものが多く、文字の意味が分かるものは多くありません。地名や人名のほかに、掘起の良い青葉や文字が書きされることもあります。町の東山遺跡では「万田」などと書かれた土器が大量に出土していて、壺などを作りまつりをした跡だと考えられています。

西原敷遺跡では、平安時代の井戸の底から大きな石皿と土器、桃の種などが発掘されました。地中深くがら水を汲み上げる井戸は、古くから神聖な場所で、地下の黄泉につながる冥界の入口とも考えられていました。使わなくなった井戸を埋めるときには、魔除けの儀式をしました。桃は、不老不死や邪気を払う力のあるものと信じられていました。西原敷遺跡でも、井戸を埋める前に土器や桃などを沈めて魔除けのまじないの儀式を行なっていたのでしょうか。



文字の書かれた土器（前戸内遺跡） 土器や桃などが沈められた井戸跡（西原敷遺跡） 井戸の底から発掘された土器と石皿（西原敷遺跡）

古いの習俗と「イエ」のルーツ

六角遺跡と纏ヶ坂遺跡などでは、江戸時代の墓地が発掘されました。どちらも見崩しらしの良い丘の上にあります。長い年月間に遺骨は土に混っていましたが、埋葬された人の生前の用品が多く出土しました。比較的裕福な豪農一族の墓地だったようですね。

お墓に入れたお金は、あの世で三途の川を渡るときの渡し銭や、極楽へ行くまでの旅費として家族が死者に持たせたものです。茶碗には、ご飯一杯に盛って持たせました。旅立つ死者のお弁当です。纏ヶ坂遺跡では、棺の中に铁鎧が入れられていたもののようですが、特殊な病氣や事故、事故で亡くなった人のようですが、その炎が周囲の人ひとに広がらないようにするためのまじないだったようです。

現在では、亡くなつた人を火葬にして遺骨を先祖代々のお墓に見納めるのが普通ですが、昔は一人亡くなるごとに墓穴を掘って埋葬しました。はじめは一人の墓ががくられるようになったのは、庶民が「佐藤家」や「我家家」といった「イエ」のつながりをはつきりと意識するようになったことと関係しています。私たちの「イエ」のルーツも、ひょっとしたらこのあたりにあるかもしれません。

